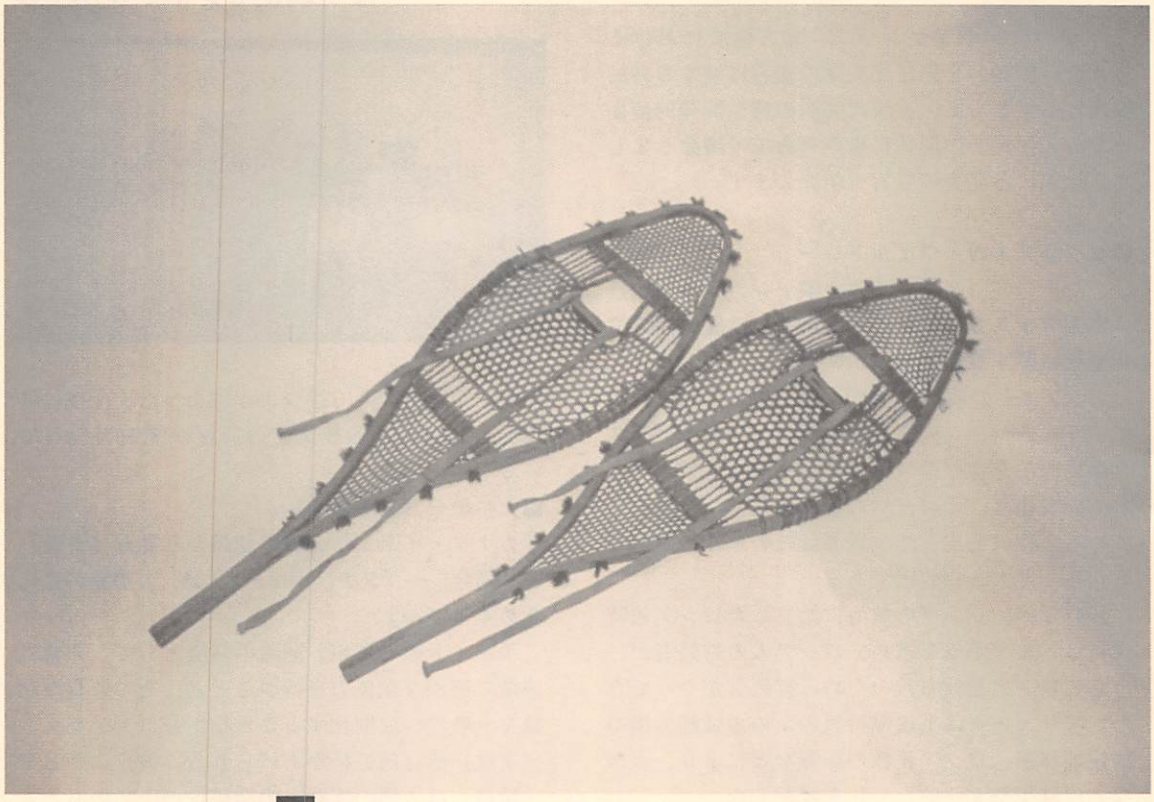
ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



かんじき

アサバスカ・インディアン

カナダ

長さ98cm　幅29cm

北方民族博物館だより
ー第32号ー

第13回北方民族文化シンポジウム　2
講座「オホーツクの土器の話」・「トーテム・ポールと観光」　5
「映像に見るクマと北方民族」
博物館クラブ「土器づくり」　7
News　8

平成10年11月12日(木)、13日(金)

第13回北方民族文化シンポジウム

「北方の開発と環境」

於：網走セントラルホテル

今回のシンポジウムでは、北方地域における様々な「開発」を先住民文化の変容に対する外的要因としてとらえ、近現代文明の持つ開発的側面と北方先住民との関係に焦点をあてて議論しました。以下に各発表の要旨を紹介します。

■ダグラス・W・ヴェルトレー
（アラスカ大学アンカレッジ校）

「南西アラスカのアリュートにおける歴史期の文化変化に関する環境との相関」

ロシア人との最初の接触以来、約250年にわたってアリューシャン列島、プリビロフ諸島とアラスカ半島西部を含む地域のアリュート文化に生じた多くの変化は、その自然環境の変化と深く関わっている。特に毛皮と漁業資源はこの地域の開発をもたらした大きな要因である。

1741年ベーリングの航海に始まったロシア領時代には、まず毛皮を求めてロシア人の狩猟者が、そしてロシア正教布教のために宣教師がやってきた。アリュートは毛皮獣狩猟のための強制労働や居住地移転、ロシア正教の影響などにより、大きな人口減少や文化的な変化を経験した。

1867年にアラスカはアメリカ合衆国に売却され、アリュートの居住地域はアメリカ領となる。ロシア領時代と同様に毛皮と漁業資源の開発がアリュート労働力をもとに続けられた。この時期まで特に学校教育によって次第にアリュート語が使われなくなっていったが、食料入手など生業の面においてはかなり伝統的な様式が保持されていた。

第２次大戦中、合衆国政府は戦略的理由からアリュートを南西アラスカに強制抑留した。しかし彼らが抑留された土地は劣悪な環境で、抑留中に人口の約１割が死亡した。その後、アリュートが彼らの故郷に帰った時には、合衆国軍によって家々は破壊され、個人所有物も壊されたり盗まれたりしていたが、それらに対する政府の補償もわずかなものであった。

大戦後にもっとも大きな変化をもたらしたのは1971年に連邦議会を通ったアラスカ先住民土地請求権解決法(ＡＮＣＳＡ)であり、これにより金銭的、政治的、資源開発の面からもアリュートは自らの決定権を大きく持つようになった。今後は経済発展のほかに伝統文化の回復が課題となっている。

■大村敬一（大阪大学）

「カナダ・イヌイトの環境認識から見た『資源』と『開発』～『ヌナ（nuna：大地）』概念の変化をめぐって～」

イヌイトの「環境」認識の特徴として、非常に博識で確かな記憶力を持つことと、その豊富な知識を一般化、法則化することを拒むコンテキスト（文脈）依存的性格があげられる。彼らにとって「環境」は人間の実践との関係性の中でのみとらえられるものである。このことは「環境」を人間の実践と切り離されても存在可能な客観的な情報としてとらえ、コンテキストを省いた客観的な事実を一般化し、法則化しようとする「近代」の科学的知識のシステムとは対極をなすものである。

このようなイヌイトと近代科学との間の「環境」観と知識観の違いは、ミシェル＝ド＝セルトーが提示した「戦術」と「戦略」の区別に符合する。近代科学の「戦略」的な知においては「環境」を管理して操作しうる「資源」という客体としてとらえるが、イヌイトの「戦術」的な知においては、実践によって自己に内在化された「環境」と人間の無数の関係、例えばチェスでいう「手」のように記憶したものを「資源」とみなしている。彼らにとって「環境」は野生動物と同様に人間と相互依存関係にある対等な存在なのである。

しかし今日のイヌイト社会では、1970年代以降近代国民国家や産業資本主義経済の世界システム

への同化・統合に伴い、「戦術」的な「環境」観が次第に浸透し、特に若者の間でイヌイトの「戦術」的な「環境」観とせめぎあっている。このことが世代間のギャップを生み、イヌイトの「戦術」的な知の枠組みも少しずつ変質しつつある。

今後も「環境」を客体化して「資源」として開発する必要性を迫られていくイヌイトにとって、この相反する「戦術」的な知と「戦略」的な知をどのように融合していくかが重要な問題となるだろう。

■ヴィクトリア・V・ペトラショヴァ
（カムチャツカ生態学・自然管理研究所）
「カムチャツカ先住民の民族生態学的知識
ー実態と神話ー」

ロシア・カムチャツカ州は、イテリメン、コリヤーク、エヴェン、アリュート、チュクチなど、多くの先住民が居住するという点で特異な地域である。

先住民は環境と密接に関連を持つ生態的・社会的・文化的集団として、特別な民族社会集団である。産業文明によって先住民の伝統的な生活単位や独自の民族文化は変化し、自然は破壊され、先住民が特定の生態的地位を占めるといった貴重な経験が失われつつある。このような経験は、いまや地球全体、さらには宇宙をも含む無限の空間を支配している人類にとって重要なものである。

生活基盤を安定させること、心理的解放感を生み出す伝統的な雰囲気づくり、生活自体を楽しむ態度などは、寒冷な気候のもとで快適に生活するために先住民によって洗練されてきた適応の方法である。

さらにカムチャツカ先住民の民族生態学的知識、つまり家を暖かく保ったり、簡単な道具を作る方法、食用・薬用の植物・動物の利用法、陸獣類・鳥類・海獣類の行動に関する知識、環境の変化や地理的特徴についての情報収集などから、寒冷地の厳しい自然環境に対する独特な適応を学ぶことができる。

先住民の民族生態学的知識を明らかにするためには、基本的な社会経済学的・文化的・言語学的な調査が必要である。これらに関する日本の研究者との共同研究の実現は、カムチャツカ先住民の商業的、精神的、知的文化の回復や保全、発達の道筋を探るための新たな可能性を生み出しつつある。

北方民族のために民族的遺産の回復を支援することによって、民族生態学的知識が失われることを防ぎ、独特な伝統的文化を維持することができる。これらはまた、国連の「先住民族の１０年」宣言にも寄与するものである。

■大島　稔　（小樽商科大学）
「カムチャツカ半島コリヤークの伝統的生業・トナカイ飼育における変化」

カムチャツカにおける開発が先住民文化に及ぼした影響を分析するためには、1)ソ連期の国営農場化・定住化、2)ペレストロイカ（改革）以降という二つの時期を転換期としてとらえる必要がある。これらの時期の伝統的生業・文化の変化について、これまでの調査をもとに分析する。

カムチャツカにおける開発の特徴は、環境汚染が比較的少ない一方で、森林・漁業・動物資源の乱伐・乱獲が著しい点である。これらの最大の要因は、地域住民の定住化、地方都市への集住化とソフホーズ（国営農場）化など国家政策によるものである。カムチャツカでは1935年前後にトナカイ遊牧民の定住化政策が始まり、1940年代には伝統的居住地から都市への集住化が進んだ。1950年代には国営農場化が進行した。

都市への定住に伴って伝統的な遊牧生活は失われ、飼育に従事する専門技術者のみが季節的移動生活を行うようになった。生産効率重視の資源管理のために機械化が行われ、ガソリンに依存するようになり、それに伴って輸送用・屠殺用トナカイ数は減少したが、遊牧地は荒廃し、トナカイ総数は今世紀初めの220万頭から1990年代には180万頭まで減少した。社会的な影響としては、学校教育の寄宿制度により伝統的飼育技術の伝承が断絶し、伝統的知識と経験が失われた。

ペレストロイカ以後、問題はさらに深刻化し、ソフホーズ、私企業ともトナカイ数の減少という問題に直面している。この原因は、ガソリン不足とヘリコプターによるオオカミ駆除の中止のために生じた被害の増大であるという。さらに深刻なのは、ソフホーズでの給与遅滞によってトナカイ飼育従事者が減少していることである。若い世代の飼育技術不足も問題となっている。

■タチアナ・P・ローン
（サハリン州立郷土博物館）
「サハリンのウイルタ
ー近年における開発の諸問題ー」

サハリンに住むウイルタ（約350人）のおかれている状況は、彼らの生活様式や経済活動、社会構造そして文化的な面においてかなり変化した。こうした変化は旧ソ連時代に急激に進行し、現在までも引き続いている。

特にサハリン北部に居住するウイルタにとっ

て、彼らが伝統的に暮らしていた土地は、サハリンの最も重要な経済的問題である石油・天然ガス産業の開発によって危機に瀕(ひん)している。彼らはコルホーズ（集団農場）で主にトナカイ飼育を行っていたが、1960年から1986年までの間にトナカイ飼育を行っていた土地の80％を失った。これらの土地は特別の許可も金銭的な補償もなく、油井として奪われてしまった。そのためにトナカイを飼育できなくなったことから、多くの失業者が生まれた。さらに飼育トナカイの数は半分に減らされ雇用者も削減されて、管理が不十分になったこととあいまってトナカイは次第に野生化してきている。

サハリン大陸棚の開発では、開発会社は飼育トナカイの夏の放牧地を通るパイプラインの建設を計画している。

伝統的な暮らしの土地を保持することは、ウイルタと政府にとって現在最も重要な問題であるが、それを困難にしている要因として、ウイルタが少数民族であること、彼らのおかれている政治的状況、指導者的存在の欠如、他民族出身者との結婚などを含めて外部から受けるさまざまな影響などがある。

民族の意識は変化していて、それは特に言語に、ウイルタ語が徐々に、そして日常生活において全く使われなくなることにあらわれている。同時に北部のウイルタの若者たちは自らの民族呼称として「ウイルタ」ではなく、ロシア人からの呼称である「オロチョン」を用いるようになっていて、これはウイルタ語を話せない世代に多くみられる。

このような事態を考えて、私はウイルタ語の初歩的な文法書づくりを現在試みているが、ウイルタのロシア人への同化と消滅を食い止めるためには州や連邦政府による法律や制度が必要である。

■高倉浩樹　（東京都立大学）

「風景への開発　ーシベリア・北部ヤクーチア住民の多様化する実践の理解に向けて」

ソ連崩壊後、市場経済の導入によるロシアの経済的・社会的混乱は現在も続いている。本発表の目的は、シベリア先住民が社会的・経済的な不安を解消するために行っている多様な実践を「風景の開発」という視点から理解することである。文化人類学における「風景」とは、地域の人びとの文化的・物理的環境および社会的・文化的生活を意味する。本発表では、サハおよびエヴェンの人びとが多数居住しているバタガイアリタ村（ロシア・サハ共和国）を取り上げる。

ソビエト体制の下では、シベリア先住民に対して農業の集団化、行政地域への強制的な定住化などの開発政策が進められてきた。バタガイアリタは1930年代に地域の行政中心地として設置された集落である。町では民族や血縁とは無関係に住宅が配置され、トナカイ飼育が中心のソフホーズでは、民族とは無関係に職業牧夫として従事できるようになっていた。また、日用品はソ連全土でみられる標準的なものに限定されていた。つまり、その「風景」にシベリア先住民の民族誌的ユニークさを見出すことは困難だった。

ソ連崩壊後、ソ連時代に標準化された「風景」から、人びとが自身の「風景」を開発することが必要となった。すなわち、家畜の資産管理が国家から事業体に移り、市場経済に包摂されるなか、ソフホーズ・システムに代わる安定した流通・販売システムが未構築であったため、各個人が経済的生き残り戦略を開始した。バタガイアリタでは、ソフホーズが共同的な農業事業体へと変化したものの、トナカイ飼育の構造は継承されている。しかし、そのなかで血縁関係を中心とした利益追求型の独立事業体を作り、流通・販売を独自に行おうとする動きが生まれている。また、肉・毛皮よりも高価なトナカイの袋角の販売や、都市で購入した日用雑貨をバタガイアリタで販売するといった行商を行う者も出てきている。

このように、シベリア先住民の「風景」は、ソ連時代の基盤を残しながらも少しずつ変化しつつある。「風景」の概念は、明白な変化だけでなく微妙な変化の重要性を認識する上で有効といえる。

＊　＊　＊

座長には井上紘一氏(北海道大学スラブ研究センター)、岡田宏明当館館長、スチュアート　ヘンリ氏（昭和女子大学)、谷本一之氏（北海道立アイヌ民族研究センター)の４名を迎え、ロシアや北アメリカにおける事例をもとに北方先住民の文化や社会が「開発」といかに向き合っていくのかが討論されました。（学芸課　中田　篤・稲垣はるな）

10月28日

オホーツク土器の話

講師：稲垣はるな（当館学芸員）

今回の講座ではオホーツク文化のさまざまな遺物のうち、特に遺跡の時期を決定する際に重要な役割をもつ土器をとりあげました。以下にその要旨を報告します。

＊　＊　＊

北海道の土器文化は縄文時代早期に始まり、その後続縄文時代、擦文文化期・オホーツク文化期まで土器は使われ続けてきた。オホーツク文化は、サハリンを通って大陸から渡ってきた外来の文化だと考えられているが、それは土器の特徴からもいえる。オホーツク土器の範疇（ちゅう）に含めることのできる土器がサハリンや大陸で出土するほか、北海道において同じ頃に作られ使用されていたと考えられる擦文式土器などと較べて、オホーツク土器には独特な属性がある。胎土・色調・器形・文様に製作技法に関わる特徴的なものがみられる。特に文様は古い時期から刺突文・刻文・沈線文・貼付文の順に出現し、編年の主なめやすとなっている。貼付文のうちソーメン文ともよばれる細いひも状の文様は道東部にみられ、その施文は「ヘビつくり法」によるもので、かなりの熟練が必要だったのではないかと考えている。

オホーツク土器の完形のものは住居址（し）や墓坑からの出土が多いが、特に焼失住居には、出土数や出土状態から土器がどのように使われていたのかを考える手がかりが多くある。ほぼ壺（つぼ）形とかめ形の煮沸・貯蔵形態のものに限られるオホーツク土器の器形のバリエーションの少なさは、焼失住居における木製容器の出土から、食器として木製品を用いていたためだと考えられる。

道東部のオホーツク文化はその終末期、擦文文化の影響を受けてトビニタイ文化に変容していくが、その典型的な変化もトビニタイ土器の文様や器形にみられる。

＊　＊　＊

当日、12名の参加者の方々には、当館に展示・収蔵されている網走市モヨロ貝塚、湧別町川西遺跡出土のオホーツク土器や網走市美岬4遺跡出土の擦文土器、羅臼町トビニタイ遺跡出土のトビニタイ土器のレプリカなどをお見せしながら話を聞いていただきました。

11月18日

トーテム・ポールと観光

講師：齋藤　玲子（当館学芸員）

トーテム・ポールは日本人にとってなぜかなじみが深く、公園や遊園地、小・中学校の校庭などで多くの人が一度は見たことがあるでしょう。しかし、その意味やどの地域の民族文化であるのかを知っている人は多くないと思われます。

この講座では、北アメリカの北西海岸インディアン諸族の文化とトーテム・ポールの歴史、さらに、今夏の東南アラスカでの調査の概報を兼ねて民族文化を体験する観光ツアーの最近の様子をも紹介しました。以下に、あらましを報告します。

＊　＊　＊

北西海岸インディアンの住む東南アラスカからカナダのブリティッシュ・コロンビア州、アメリカのワシントン州北部にかけての地域は、高緯度ながら温暖・湿潤な気候で、複雑な入り江と穏やかな海に囲まれ、巨大な針葉樹の森と海の幸に恵まれている。彼らの文化の特筆すべき点は、①豊富な水産資源、特にサケに依存した経済、②農耕を伴わない社会階層制や出自集団などの社会組織、③ポトラッチなど儀礼的生活の発達、④木工品の著しい発達、⑤トーテム・ポールや仮面に代表される複雑な芸術形態、とされる。

トーテム・ポールは大きく独立柱／記念柱・墓柱・入口柱・家（屋）柱の4つに分けられるが、我々が一般的なものと認識している高さ10数メートルにもなるポールはこの内の独立柱で、実は19世紀から今世紀初頭にかけて、白人との接触後に爆発的に流行したものであった。「トーテム」とは、簡単に言えばある出自集団の祖と関係があるとされる動物のことである。ポールに彫刻されているモチーフは、動物や人物、太陽などの自然物で、すべて神話やそれに類似した伝承を象徴しており、それらは一族に独占的に伝えられている。

今世紀半ばにはいったん廃れたかのように思われていたトーテム・ポールは、芸術として再び注目を浴び、現在は観光客にとっても魅力的なものとなっている。

多くのスライドを用いて、現地のトーテム・ポールの保存・活用の状況や、それぞれのポールのいわれなども紹介した。

講　座

11月25日

映像に見るクマと北方民族
ークマに対する信仰ー

講師：渡部　裕（当館学芸課長）

北方諸民族のあいだではクマを特別の動物と考える観念が発達していて、クマに対し畏敬の念をもつばかりか、クマは神の使いあるいは神そのものであるとする観念が広く見られます。本講座では当館で収集した映像資料から次の作品の一部または全部を上映し、クマに対する具体的な信仰を紹介しました。

・『アイヌ－白老村の生活』／1925年撮影、監督八田三郎（北海道帝国大学）／1992年東京シネマ新社復元。
・『熊祭』／1935年撮影、監修犬飼哲夫（北海道帝国大学）／1993年東京シネマ新社復元。1935年１月旭川近文で行われた川村カ子ト氏主宰のクマ送りの記録。
・『最終段階にて』／1992年ソン・シネマ社（カザフスタン共和国）制作。サハリン・ニブフのクマ送り儀礼。
・『ウリチの熊送り』／1991年３月撮影／1992年ユーラシア・プロジェクト制作。1991年３月アムール川下流ブラバ村で開催されたウリチのクマ送りの記録。
・『ハンティの熊送り』／1990－93年Studya Viz An(Tomsk)制作。西シベリア・ハンティのクマ送りの記録。
・『ワタリガラスに祈る：５－クマと生活』／1988年アラスカ大学フェアバンクス校制作。アラスカ・コユコンのクマ猟とクマに対する観念を記録。
・『ミスタッシニのクリーのハンター』／1974年カナダ国立映画制作庁制作。カナダ東部・クリーの冬の狩猟キャンプにおける生活の記録。

アイヌ、ニブフ、ウリチの映像は飼いグマ送りの儀礼が記録されており、ハンティの映像も含め、これまで報告されているクマ送り儀礼を具体的に確認することができる貴重な映像といえます。また北アメリカの２本の映像はクマや火に対する狩猟民の観念や具体的な取扱いを記録した作品です。おそらく講座に参加された方々はクリーの狩猟者が火に捧げものをしたり、「クマはなんでも見とおすことができる」と述べた場面から北方の森林地帯に住む狩猟民の観念を確認されたことと思います。

博物館クラブ

9月11日、10月24日

土器づくり

講師：稲垣はるな（当館学芸員）

９・10月の博物館クラブでは、オホーツク文化期をはじめ先史時代の人びとが食物を調理したり、貯蔵するために使用した土器づくりを試みました。９月の１回目には、土器について簡単に説明をした後、粘土をこねて土器を形作るところまでを行いました。粘土は市販の野焼き用粘土を使い、まずなめらかになるまでよくこねます。その後、円盤状の底部を作り、粘土ひもをまわりに積み上げて器壁を作っていきます。文様はそれぞれに好きなようにつけてもらいましたが、オホーツク式土器をまねた貼付文のほか沈線文や縄文などをつけたものもありました。

10月の２回目には、乾燥させておいた土器を野焼きしました。焚き火のまわりに土器を並べ、少しずつ火に近づけて徐々に熱していきます。焼成中の土器はいったん赤くなり、黒くなった後、また明るい褐色に戻って、焼成完了です。焼成中に底部や器壁の厚い部分が剥がれてしまったものもありましたが、土器自体が小さかったためか、ほとんどの土器が壊れずに焼きあがりました。

２回とも９名の小中学生とその父兄の参加がありました。

土器を形作る参加者

野焼きの様子

平成10年度企画展

「チベットの人と文化」

チベット文化は夏季でも冷涼な高原環境のなかで、河畔地帯におけるオオムギなどの畑作と高原や山地におけるウシ・ヤク・ヒツジ牧畜を基盤とし、人びとはこのような農耕・牧畜にもとづき古くから仏教を受容し、独特のチベット文化を発達させてきました。実物資料や写真資料を通じて寒冷な環境で発達したチベットの牧畜文化や生活文化を紹介します。

開催期間：1999年２月２日(火)－３月20日(土)
休 館 日：毎週月曜日、２月18日（木）
観 覧 料：無料

関連事業
■講座「チベットの人と文化」（聴講無料）
２月27日(土)13:30～16:00
講師：大泰司紀之氏（北海道大学）
月原敏博氏（大阪市立大学）

北海道民族学会研究会を網走で開催

11月14日、北海道民族学会平成10年度第２回研究会が４名の発表者を迎えて当館講堂で開かれました。内容はまずロシア・カムチャツカ生態学・自然管理研究所のヴィクトリア・ペトロショヴァ氏による「カムチャツカ：自然、人間、文化」と当館学芸課長の渡部裕による「カムチャツカ先住民族のサケ漁」の２つの研究発表が多数のスライドを交えて行われました。このほか、調査概報として当館学芸員の齋藤玲子による「メトラカトラ村(アラスカ・チムシャン)における調査；特にネイティブ・ビレッジ・ツアーの現状について」、資料紹介として斜里町立知床博物館学芸員の宇仁義和氏による「知床博物館所蔵のアイヌ資料について」などの報告がありました。北海道民族学会の研究会が網走で開催されるのは初めてのことですが、道外や札幌、釧路などから来られた方も含めて、約30名の参加者がありました。

今号の表紙－かんじき－

かんじきは日本を含む北東アジアから北アメリカの積雪地帯に主に分布する雪上歩行具である。地域によって大きさや形状は様々であるが、アジアに起源があると考えられている。写真の資料はカナダ北西部からアラスカに居住するアサバスカ・インディアンのもので、曲げた木の枠材の両端を合わせて鉄釘(くぎ)を用いて接合している。先の丸い方が前部、尖った方が後部になる。横木は2本取り付けられ、動物の皮で編まれた丈夫なネットが張られている。ネットと木枠の取り付け部分の外側には赤い糸の飾りがつけられている。積雪の多い地域では、かんじきは冬期の狩猟の際に欠かせない履物であり、スキーやそりと並んで人類が北方へ進出する際に画期的な役割を果たしたものだと思われる。

みんぞく　こうこ　はくぶつかん in 北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

9/30 萱野茂氏のアイヌ語事典をＣＤ－ＲＯＭ化、年内にも発売／Ｄ
10/9 縄文後期、国内最北の定住集落跡を発掘：大量の平玉の副葬品も出土、礼文町船泊遺跡／ＡＳ
10/9 老朽化進むサハリン州郷土博物館、北海道が改修を支援：友好の象徴として／Ｍ
10/21 アイヌ文様（渦文）の石製装飾品が出土：17世紀の凝灰岩製、伊達市有珠ポンマ遺跡／Ｄ
11/12 北大に総合博物館建設決定：2001年に本格オープン予定／Ｙ
11/22 オホーツク文化の源流、ニブヒ族にあり？：羅臼町出土の木製品、ニブヒの料理道具と酷似／Ｄ
11/26 近世アイヌ女性の墓から希少価値の高い白磁が出土：道内初、活発な交易を証明、恵庭市カリンバ２遺跡／Ｄ
11/29 第11回「アイヌ民族文化祭」で伝承文化を披露：古式舞踊やアイヌ語劇など、浦河町／ＡＳ
12/7 「アイヌ文化を学び継承する女性の会」設立：アイヌ刺繍(しゅう)や編物などアイヌ民族伝統の女性文化の継承を図る、札幌市／ＡＳ
12/23 国後島・古釜布（ユジノクリーリスク）でアイヌ民族展：初の本格的展示会が郷土博物館で開かれる／Ｄ

＊AS：朝日新聞、Ｄ：北海道新聞、Ｍ：毎日新聞、Ｙ：読売新聞
複数紙掲載の場合は扱いの大きい方を紹介しています。

News

■寄贈資料紹介

・版画：網走市の小澤斉氏から北西海岸インディアンの版画１点が寄贈されました。

・袋ほか：札幌市の谷本一之氏からチュクチの袋、石、イヌイトの人形、仮面各１点が寄贈されました。

・火錐板：ロシア・ペトロパブロフスク＝カムチャツキーのヴィクトリア・ペトロショヴァ氏からコリヤークの火錐板１点が寄贈されました。

・人形：中国・ハルビン市の曲守成氏から人形１点が寄贈されました。

・ヨーヨー：金沢市の益子待也氏からイヌイトのヨーヨー１点が寄贈されました。

・太鼓ほか：札幌市の岡田淳子氏からチムシャンの太鼓とばち、女性用衣服各１点、版画２点が寄贈されました。

・首飾り：網走市の北川アイ子氏からガラス製首飾り１点が寄贈されました。

＊　＊　＊

・サケ：網走市の今野庄一氏から提供されたサケでウイルタの保存食（チャッチャビ他）を作りました。

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等

・Birgitta Jahreskog ed. 1982 *The Sami National Minority in Sweden,* Rättsfonden

・張政　1991『黒龍江民族風俗概覧』黒龍江省民族博物館

・孫進己　1987『東北民族源流北方史地叢書』　黒龍江人民出版社

・К.Н.Халоймова 1994 *Демям Кумха*, Фипма Сзто-Ст

・В.М.Латышев, М.М.Прикофьев, Т.П.Роон 1997 *Извесмця* Институт наследчя Бронислава Пилсудскаро

・岸上伸啓　1998『極北の民　カナダ・イヌイット』　弘文堂

■主な来館者

10/9　アイヌ文様刺繍家
　　チカップ美恵子氏
　サミ議会関係者　R.A.Skum氏
　　J.Marainen氏
　　ほか４名

11/3　モンゴル国立農業大学
　　B.Luvsansharay教授
　　A.Bakey博士
　　J.Batchuluun博士

11/17　文化庁文化財保護部建造物課
　　亀井　信雄氏
　中国黒竜江省民族博物館
　　館長　曲守成氏
　　張　成氏

■ロビーコンサート'98

12月23日、毎年12月恒例のロビーコンサート'98「青少年のためのピアノ三重奏とバリトンの夕べ」が当館ロビーで行われました。今年は札幌交響楽団団員の石原ゆかりさんと川崎昌子さんのほか、ピアノの浅井智子さん、バリトンの則竹正人さんに来ていただきました。シューベルトの歌曲のほかに、クリスマスソングなどなじみのある曲がたくさん演奏されました。網走市近辺から300人近い方々が演奏を聴きに来てくださり、楽しい夕べになりました。

■その他の行事報告

11/28(土)博物館クラブ
　「とんぼ玉づくり」

12/12(土)博物館クラブ
　「植物で染め物をしよう」

1/23(土)　博物館クラブ
　「さかなの料理
　　－ひものづくり－」

■観覧者動向（10～12月）

（名）

	常設展示
10　月	2,695
11　月	891
12　月	323
計	3,909

■行事案内（２～３月）

2/2(火)～3/20(土)
　企画展「チベットの人と文化」

2/13(土)博物館クラブ
　「北方民族の狩猟法
　　－ワナの仕組みを学ぼう－」

2/27(土)講座
　「チベットの人と文化」

遠藤欣一郎氏　逝去

玩具研究家の遠藤欣一郎氏が昨年12月８日に逝去されました。
同氏には長年にわたり、世界の民族玩具や民族文化に関する情報・資料の提供ならびに書籍、資料の寄贈をいただいておりました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

■編集後記

オホーツク海の流氷が例年より早くやって来ました。今冬は網走も雪が多く、冬らしい冬です。　（稲垣）

北方民族博物館だより
— 第　32　号 —
1999年１月26日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見313-1
ＴＥＬ　0152-45-3888　ＦＡＸ　0152-45-3889